人間文化創成科学論叢　第21巻　2018年

テレビに出演する「おネエタレント」の役割・期待・演出と言語行動の関わり

河　野　礼　実*

Relation between roles, expectations, and performances and language behaviors in "*Onê-talents*" on TV programs

KAWANO Ayami

Abstract

The previous research concluded that "*Onê-talents*" have diversity of language behaviors. This paper reexamined their language behaviors by adopting perspective of their roles which they had been expected and assumed on TV programs. The one of results shows that they play three major roles which are sharp tongues/criticizing, teaching and being teased on TV. The other result indicates that each role they played on TV shows have common features in language behaviors. This paper revealed tendency relations between the roles of "*Onê-talents*" on TV program and their verbal/nonverbal features.

Keywords：*Onê-talent*, language behavior, role, conversation analysis, TVprogram

1．はじめに

2000年代以降、テレビをはじめとするメディアにおいて、「おネエタレント」「おネエキャラ」と呼ばれる人たちの起用が急激に広がった。「おネエ」という語は、もともとゲイコミュニティで「言葉遣いやしぐさが女性的なゲイ」を指す用語として使用されてきたが、近年メディア上では、「生物学的に男性だが（あるいは男性であったが）、装い、しぐさ、言葉遣いなどで女性ジェンダーの特徴を有する人」（河野，2015a；河野，2015b）を指す用語として使用されている。

「おネエ」が話す（と考えられている）ことばは、一般的に「おネエことば」と呼ばれている。マリィ（2013）は、「おネエことば」、「おネエキャラ」が主流メディアへと越境する中で、どのように表象・消費されているかを、バラエティ番組『おネエMANS』[1]に登場する「おネエキャラ」のことばや番組内で使用されるテロップなどから分析している。河野（2015a，2015b）では、複数のテレビ番組から具体的データを採取し、「おネエタレント」の言語行動について分析するとともに、フィクション作品（映画、テレビドラマ、小説、マンガ）に登場する「おネエキャラ」の言語行動についても比較分析を行った。その結果、フィクション作品に登場する「おネエキャラ」たちは形式面において共通した言葉遣いを採用している一方、バラエティ番組に出演する「おネエタレント」たちには個人差が目立ち、彼/彼女らの言語行動は多様であるということが明らかになった。

しかし、「おネエタレント」の言語行動を、番組内での役割や演出のされ方という観点を導入し観察すると、多様性の中にも共通点が見えてくる。そこで本稿では、河野（2015a，2015b）で使用した「おネエタレント」

キーワード：おネエタレント、言語行動、役割、会話分析、テレビ番組

＊平成27年度生　比較社会文化学専攻

の会話データを改めて分析し、多様性の中にある話者間の共通点について考察を行う。さらに、その結果をふまえ、メディア上に見られる期待・役割と言語行動との結びつきについて論じる。

2．分析対象

分析材料は、2013年１月～2014年５月に放送されたバラエティ番組16本、それぞれ５～10分の会話録画データである。データはすべて文字起こしを行い、分析には会話分析の手法を用いた。対象者[2]および対象番組の具体的情報は、表１のとおりである。なお、対象者の情報は、対象者個人のホームページや著書を参照した。

表１　対象者[3]および対象番組

名前[4]〈年齢[5]：職業〉	番組名（放送日）テレビ局名
美輪明宏〈78：歌手、俳優、演出家〉	①『シューイチ』（2014年４月20日）日本テレビ
尾木直樹〈67：教育評論家、大学教授〉	②『今、この顔がスゴい！』（2014年２月13日）TBSテレビ
	③『エデュカチオ！』（2014年４月26日）NHK教育
ＩＫＫＯ〈52：美容家〉	④『しゃべくり007』（2013年３月18日）日本テレビ
	⑤『ウチくる!?』（2014年３月16日）フジテレビ
小椋ケンイチ（おぐねー）〈45：ヘアメイクアップアーティスト〉	⑥『AKB48vs芸能人ファミリー＆おネエ48』（2013年１月３日）日本テレビ
本田ヒカル（ピカ子）〈42：メイクアップアーティスト〉	⑥『AKB48vs芸能人ファミリー＆おネエ48』（2013年１月３日）日本テレビ
マツコ・デラックス〈41：コラムニスト、エッセイスト〉	⑦『月曜から夜ふかし』（2014年３月17日）日本テレビ
	⑧『５時に夢中！』（2014年５月５日）TOKYO MX
はるな愛(本名：大西賢示)〈41：タレント〉	⑨『関ジャニ∞のジャニ勉』（2014年３月５日）関西テレビ
ミッツ・マングローブ〈39：歌手､女装家〉	⑥『AKB48vs芸能人ファミリー＆おネエ48』（2013年１月３日）日本テレビ
	⑩『ボクらの時代』（2013年12月29日）フジテレビ
IVAN〈30：モデル、アーティスト、タレント〉	⑪『有吉反省会』（2013年９月28日）日本テレビ
	⑫『アナザースカイ』（2014年４月25日）日本テレビ
假屋崎省吾〈不明：華道家〉	⑬『あさイチ』（2014年３月17日）NHK総合
	⑭『プレバト』（2014年４月17日）TBSテレビ
クリス松村〈不明：タレント〉	⑥『AKB48vs芸能人ファミリー＆おネエ48』（2013年１月３日）日本テレビ
	⑮『ダウンタウンDX』（2014年５月15日）日本テレビ
ナジャ・グランディーバ〈不明：タレント、パフォーマー〉	⑯『有吉弘行のダレトク!?』（2014年４月１日）フジテレビ

3．分析結果

本稿で対象としたデータを分析する中で､「おネエタレント」たちが求められ､果たしている役割には､「毒舌・批判する」「教える」「いじられる」の大きく３つ存在することがわかった。次節以降では、それぞれの役割を担う「おネエタレント」たちの言語行動にはどのような特徴が見られるのか観察する。

3．1　「毒舌・批判する」

「おネエことば」の特徴の１つとして「毒舌」が挙げられる（メイナード，2005；マリィ，2013)。今回扱ったデータ内では特にマツコ、ミッツ、美輪の３名に「毒舌・批判する」発話がしばしば見られた。以下に、彼/彼

女らの毒舌[6]の例を挙げる。

（1）　村上信五：一人、舞台終わった時に、ま、スタッフ少ないから、ま、《左手でコースターを渡すジェスチャーをする》今年もありがとうございました《左手で首の後ろをかきながら》っていうのんで
マツコ：コースター配ったの？
会場：≪笑いと悲鳴≫
マツコ：《村上をにらむ。》
村上：《顔をしかめ、「失敗した」という表情をする。》
マツコ：なに、おまえなんかコースター協会とかと癒着してる？なんで？なんでコースターになるの？
(⑦)

（1）は、村上がコースターをプレゼントに選んだことに対する批判である。口調は乱暴だが、ユーモラスな毒舌である。この例は目の前にいる相手に対する毒舌であるが、データ中にはその場にいない特定の人物に対する毒舌も見られた。

（2）〔中山秀征が美輪にインタビューしている。美輪が自身の体験について話した後で〕
中山：へーでもそれはかなりこう反発も買ったんじゃないんですか？その昭和の時代になってくると。
美輪：石原慎太郎さんなんかにあんなやつはね、（中山：うん）地球上から抹殺しろなんて［書かれてましたよ。
中山：　［hhhhhh
美輪：でもわたしは負けて［ませんでしたよ。
中山：　［hhhhhhhh
美輪：でわたしも（中山：うん）てめぇだって太陽ぎょ、太陽族のくせに何言ってやがんだって［言って。
中山：［hhhhhhhh　(①)

（2）のような毒舌は、美輪だけでなく、マツコ、ミッツの発話にも観察された。また、上記３名は特定の人物だけでなく、不特定多数の人々や世間一般に対する批判もする。（3）では、ミッツが最近の女性たちのライフスタイルを「アラカルト人生」と皮肉っている。

（3）　小島慶子：普通のほら、タレントさんじゃなくても女子会みたいなところでもー、こうなんかとな、打ち合わせしてるときに隣女子会みたいなの（ミッツ：あー）《右手を耳に当てて聞くジェスチャー》わーっとこう聞いたりすると、みんなやっぱりいかにそういうさ、［女子ライフを満喫してるか［っていう。
ミッツ：　［まあそう
［アラカルト人生でしょ？いろんな選択肢から《両手の人差し指と親指で物をつまむジェスチャー》ちょこちょこちょこちょこ［ちょっとこう
小島：　［あ、そうそう。　(⑩)

３名の発話には他にも、番組内で流されたVTRに登場する面識のない人物に対する批判や、現代社会の風潮に対する批判が観察された。彼/彼女らは中村（2014）の言う「世の中を斜めに見るセンス」を持つ。そのセンスを活かし、その場にいる相手、その場にいないある特定の人物、不特定多数の人々や世間一般に対して批判を行っており、その対象に制限はない。

この３名の言語行動を観察すると、共通点がいくつか見られた。まず、言語的特徴として、ぞんざいな言葉の使用と疑問詞＋終助詞「のよ」の使用が挙げられる。

１点目のぞんざいな言葉の使用に関しては、前掲（1）でマツコは対称に「おまえ」を使用しており、他の場面でも「くそみたいなコースター」、「いらない」のぞんざいな言い方「いらねー」を用いていた。ミッツの発話にも禁止表現の「指さすな」や「ふざけんなよ」、動詞「食う」の使用が見られた。前掲の（2）では美輪が「てめぇだって太陽ぎょ、太陽族のくせに何言ってやがんだって言って」と乱暴な言い方をしている。ただし、美輪がこのようなぞんざいな言葉を使用するのは引用部に限られていた。一方、マツコとミッツは引用部に限らず、

そのまま自身の発言としてぞんざいな言い方を採用していた。

対象データ中、美輪は基本的に敬体で話しており、尊敬表現や謙譲表現も頻繁に観察された。マツコやミッツのように、ぞんざいな言葉をそのまま自身の発話として使用することは、美輪が採用しているスピーチスタイルにはそぐわないが、引用内であれば言葉遣いは制限されず、ぞんざいな言葉の使用も可能となる。そこで、美輪はぞんざいな言葉を含む発話を自己引用することにより、石原に対する強い怒りを表現していると考えられる。

２点目の疑問詞と終助詞「のよ」の共起に関しては、今回対象としたデータ内でマツコとミッツの発話にのみ現れた。以下に例を示す。

（３）　マツコ：あんたどうしてんのよ。　(⑦)

（４）　マツコ：何返したのよ。　(⑦)

（５）　マツコ：なんでコースターを選んだのよ。　(⑦)

（６）〔「ミッツが最近優しくなった」と主張する女性アイドルグループ・AKB48のメンバーたちに対して〕
ミッツ：何よ、何をわかってるのよ、あんたら。　(⑥)

（３）～（５）は、ホワイトデーのお返しについて話している場面での発話である。（３）（４）は相手に答えを求める疑問文であり、質問を投げかけられた相手が答えを言えば会話は成立するが、これら「のよ」を使用した疑問文は、「の」で終わる疑問文とは異なり、詰問するニュアンスが加わる。

一方、（５）は、単なる質問として「コースターを選んだ理由」を相手に聞きたいと思っているのではなく、「コースターをホワイトデーのお返しに選ぶなんて私には理解できない。他の物にするべきであった。」というような相手に対する批判が込められている。さらに（６）についても、「○○をわかっている。」というような質問の答えは期待されておらず、「何もわかっていないくせに、口出ししないでほしい」というような相手への抗議が込められている。

以上のことから、「[疑問詞]＋のよ」には、相手への批判や抗議、詰問の意味機能が含まれていると言える。これは『大辞林　第三版』にある、「のよ」は「疑問の意を表す語と呼応して、相手をなじる気持ちを添える。」という記述とも一致する。先に述べたように、本稿のデータで「[疑問詞]＋のよ」を使用していたのは、マツコとミッツのみであり、２名が持つ攻撃的キャラクタとことばの結びつきが示唆される。

次に非言語的特徴として、マツコ、ミッツ、美輪の３名は他の対象者に比べ、手の動きが少なかった。彼/彼女らは話すときあまり大きく手を動かさず、机の上や自分の足の上に手を置いて話すことが多かった。一般的にせわしなく手を動かしながら話す人は落ち着きがないという印象を持たれることが多い。反対に、過剰なジェスチャーのないマツコ、ミッツ、美輪に対しては、受け手は「落ち着いて話している」という印象を持つだろう。いくら妥当な批判をしていても、落ち着きがなければ、その発言の説得力はとたんに下がってしまう。過剰なジェスチャーを避ける行為は、発言の説得力を保つのに効果的に働いていると考えられる。

３．２　「教える」

対象データ内で「教える」役割を担っていたのは、尾木、假屋崎、美輪である。美輪は前述のとおり「毒舌・批判する」発言も少なからず見られたが、その一方で「教える」という役割も果たす。３名はそれぞれ教育、華道、芸能・エンターテイメントのエキスパートである。教育評論家・尾木の会話データは２番組で採取したが、教育と関係のない話をする場面は、少なくとも本稿のデータ上には一切なかった。どちらも終始教育関連の話題でコメントをしており、教育について教える役割を担っていた。

假屋崎は華道家である。データとした２番組のうち⑭は、番組に出演している芸能人７名の生け花作品を假屋崎が審査し、順位をつけるという内容であった。假屋崎は作品の批評をするとともに、その作品がどうすればよくなるかというアドバイスも行い、生け花について教える役割を果たしていた。もう１つの出演番組⑬にはコメンテーターとして出演している。教える役割は果たしておらず、視聴者と同様、情報の受容者となり、取り上げられたトピックについて感想や意見を求められる。假屋崎が教える役割を担うのは自分の本職、つまり生け花に関することである。

美輪は①で自身の経験から、エンターテイメントについて語っている。歌手、俳優、演出家として活躍する美輪は、60年以上のキャリアを持つ。また、『オーラの泉』（テレビ朝日系2005年～2009年放送）[7]への出演をきっ

かけとした「美輪明宏ブーム」以降、美輪の言葉は広く支持されるようになった。美輪は、現在メディア上で、そのキャリアからエンターテイメントのエキスパートとして教えを乞われるだけでなく、人生の指針についても教えを乞われる存在となっている。美輪はエンターテイメント、さらには人生、生きかたについて教える役割を担っている。

この３名にも言語的・非言語的特徴に共通点が見つかった。まず、言語的特徴についてだが、尾木、假屋崎、美輪の３名は、他の対象者に比べ、助詞「ね」を多用していた。（７）は尾木、（８）は美輪の発話である。

（７）　尾木：GHQがどうしてこのPTAを導入しろってことを言ったかというと、戦前のですね、我が国の軍国主義教育っていうので（東山紀之：うん）もう中央政権からズバッとこう下りてきて、末端の学校まで、（アナウンサー：うん）すべてねー、こう命令ー下でー、（東山：うん）あの教育が動いてしまうっていう、それをなんとか阻止しようというので、作って、（東山：うん）で学校の先生と保護者が対等、平等な関係でね（↑）、（東山：うん）一緒になって教育を作っていく。（東山：うん）そういうトレーニングの場としてのPTAだったんですよ。　(③)

（８）　美輪：で、やっぱりねー、あの平和になりますとね（↑）、（中山秀征：うん）あのーちょっとした方が目がこえてらっしゃるじゃないですか。（中山：うん）でやっぱりねーあのー生地１つにしてもね、あの歌舞伎と同じでね、３階席から見てもね、そのマテリアルが本物かどうかでね、その舞台全体の格調が違ってくるんですよね（↑）。

中山：なるほど。やっぱりイミテーションはイミテーション。

美輪：イミテーションはやっぱりね、遠くから見ても（中山：うん）近くから見てもね（↑）、（中山：うん）どこか芝居全体にこう、気品、気品がなくなるんですよね。

中山：あー。　(①)

假屋崎の発話でも、上の尾木・美輪の発話のように語末や句末に「ね」が頻繁に用いられていた。伊豆原（1994）によると、「語末・句末に用いられる「ね・ねえ」の機能は引き込み」であり、「話し手が話を持ち続ける中で聞き手の理解を確認し、聞き手を引き込みながら話している様子が伺える。」という。尾木、假屋崎、美輪の３名は、「ね」を用いることで聞き手の理解を確認し、聞き手を引き込みながら会話を進めており、何かを説明したり、教えたりするのに「ね」が効果的に使用されている。

美輪は対象データ内に批判的な発言も少なくなかったが、尾木と假屋崎は批判的な発言よりも肯定的な発言が目立ち、前節で挙げた３名（マツコ・ミッツ・美輪）に見られたような、他者をあからさまに批判、否定する発言は観察されなかった。以下（９）で尾木は「芸人は浅い知識でニュースを語ってほしくない」と主張している。

（９）　尾木：あのね、それでこの頃ほら、あの教育関係のことがね、去年なんかもうずいぶん話題になって、（司会者（男）：うん）でそういうときに、知らないことは知らないって言ってほしいの。

会場：あー。

尾木：知ったかぶりしてしゃべっちゃうとー、（司会者（男）：うん）ね？

江川達也：あの、専門誌とか読んだことないでしょ？あと現場も知らないですよね？　(②)

尾木は芸人に「知らないことは知らないと言ってほしい」と主張している。会場もそれに同意した様子である。その後、尾木は「知ったかぶりしてしゃべっちゃうとー、ね？」と発言し、最後まではっきりと意見を言わずに、相手に投げかけて発話を終了させている。はっきり意見を言うことで相手を傷つけてしまうことを避けつつ、自身の主張を相手に伝えている。

假屋崎は先にも説明したように番組内で生け花作品の批評を行うのだが、作品に対して肯定的なコメントをすることが多かった。最下位の作品に対しても否定的なコメントは最小限にし、批判した後には必ずそれをフォローする発言や丁寧なアドバイスを行っている。

(10)　〔最下位の廣田遥（元オリンピック選手）の作品を見ながら話している。〕

假屋崎：あのねー、なんかとっても後ろ。なんだろうこれって。過去の栄光にすがってるのかしらみたいな。

廣田：[えー。

假屋崎：[余計なこと言っちゃいますよ。余計なこと言いますよ。もっと前向きにね。

司会者：そっか。

假屋崎：XXXXX ってもらいたいなって。　⑭

(10) では廣田の作品に対して辛口のコメントをしているが、その後すぐに「もっと前向きにね。」とフォローをしている。しかも文末に婉曲表現「みたいな」を用いることで毒舌を弱めている。(10) のやりとりの後には、廣田の作品をよくするためにはどうしたらいいか、假屋崎からアドバイスがある。司会者が「これ直しようあります？」と言うのに対し、假屋崎は「いえいえいえ、このままじゃね、もう、あの心配でしょうがないので。」と廣田の作品に丁寧にアドバイスを行う。以上のように、対象データ内で尾木と假屋崎は基本的に肯定的な態度で会話を進め、主張をする際にも他者をあからさまに批判、否定することは避けていた。

また、非言語的特徴にも共通点が見られた。それは尾木、假屋崎、美輪の表情である。3名は終始微笑みながら話をしていた。その表情は、生徒を優しく諭す先生や子供を優しく諭す親のようであった。

3.3 「いじられる」

『日本国語大辞典 第二版』によると、「いじる」には「弱いものを困らせたり、苦しめたりする。からかったり、いじめたりする。(略)」という意味がある。また、『現代用語の基礎知識』(2013) では、「若者ことば」の1つとして「いじられキャラ」が紹介されており、そこには「からかいの対象となる人。遊ばれる人。」とある[8]。今回対象とした12名の中にも、テレビ番組上で「いじられキャラ」として扱われる者がいた。はるな、クリス、IKKOである。

まず、いじられる場面を1人ずつ見ていく。はるなはゲストとして出演した番組内で、登場してすぐに自分から本名の「賢示」を出す。

(11) **〔司会進行役の村上信五から紹介を受けた後の会話〕**

はるな：ちょっと待って。みんなね、《両手を左右に広げて》ノッてないよ。前ね、ヨンアちゃん来た回見たけど、めっちゃノッてた［けどXX

？(男)：　　［それはそうや。

？(男)：ノるやろー。

？(男)：あたりまえよー。

村上：ヨンアじゃないやんか。

はるな：¥え？¥《両手の手のひらを内側にして、顔の横に持ってきて》賢示？

村上：［¥うん。賢示。¥

会場：［≪笑い≫　⑨

(11) の後、「賢示」の写真（男性の格好をした昔のはるなの写真）がスタジオの大画面に映される。それをはるなは「やーだ」「ちょっと待って。早いから写真。」と番組スタッフに訴える。そのやりとりの後で、はるなは毎回女性ゲストが来たら聞いている質問（「誰がタイプか」）を、自分にも聞いてほしいと言う。その場面が (12) である。

(12) **はるな：それからあるじゃん。ほら。ゲストに聞く―（↑）［XX**

村上：　　［いやもうトーク行こうや。

はるな：え、ちょっと待ってよ。ゲストに聞く、誰かあるでしょうが。

村上：いや、だから、あれ、女性ゲストが来たときだけ聞いてんねん。

はるな：《ドスのきいた低い声で》俺もしろや。

会場：≪笑い≫　⑨

はるなは自分には誰がタイプか聞いてもらえないのを抗議し、村上の「いや、だから、あれ、女性ゲストが来たときだけ聞いてねん。」という発言の後で、それまでの声とはまったく違うドスのきいた低い声で「俺もしろや。」と言っている。ここでは声色を変えただけではなく、自称詞「おれ」、命令形の「しろ」が使用されており、《おネエ》キャラから《男》キャラに一時的にシフトしている。それに対して、会場からは笑いが起きる。河野 (2015b) ではこういった現象を「“素”が出る現象」と呼んでいる。(11) で見たように、はるなはまず自分から男性名である「賢示」を持ち出し、受け手に自分が「元々男である」ということを印象づけ、その後で「女」として扱わ

れないことに《男》キャラで反論し、笑いを生んでいる。「賢示」という名前は、ここでは「笑いのもと」となる。それを自ら提供しているのが特徴的であり、非常に戦略的な言語行動である。はるなは他のテレビ番組でも、よく音声や話し方を《男》キャラに変え、そのことで笑いを生み出している。

次に、クリスについて見ていく。クリスは、はるなのように《男》キャラを一時的に発動させたりしていない。

(13)〔クリスは高校時代、女性からも男性からもモテていた。そのエピソードとして、「マドンナ」と呼ばれていた女子生徒から好きだと言われたことを話した後で、痴漢によく遭ったことを話す。〕

クリス：女性にはだからそういう感じでモテてて一、男性にどうしてモテるかってわかったかって言うと一、（男性：うん）これはね、もう痴漢に遭いまくり。
勝俣州和：あー。
会場：［えー。
中川パラダイス：［えー男性から？
クリス：もうね、電車とかー、それから、本屋さんとか。
青田典子：えー。
クリス：も、もう触り方の種類も≪右手の指を折りながら≫ABCDEFGぐらい、すっごいいっぱいあって。
青田：［えー。
会場：［えー。
クリス：すごい触られた。
勝俣：へー。
青田典子：触った方じゃなくて、触られた方よね？
クリス：［ちがい、ちがいます。
会場：［≪笑い≫
クリス：わたしは今でも自分からは一切いきません。
会場：≪笑い≫　(⑮)

(14)〔(13) 直後の会話〕

松本人志：すごいことなってるけどねークリスねー。
クリス：え？
松本：難しい漢字の《右手で顔の周りに円を描きながら》実印みたいになってるよ。
クリス：［え、え、実印じゃありません。
会場：［≪笑い≫　(⑮)

はるなとは異なり、クリスは戦略的に笑いを提供するわけではない。共演者からのからかいに対し、クリスが必死に反論する姿に笑いが起きる構図となっている。なお、反論する際、(13) では「一切」、(14) では「ありません」の「せん」が大きく発話されていた。

最後にIKKOだが、IKKOは美容家である。本来であれば、2つ目に挙げた「教える」役割を担うはずであるが、今回扱ったデータ内に、IKKOが美容について話す場面はなく、その代わりいじられる場面が目立った。以下に例を示す。

(15)　IKKO：わたし大体、ノンケ[9]と付き合うじゃないですか。
名倉潤：知らんがな。
上田晋也：知らない。
IKKO：《立ち上がる》《高い声で》知ってくれるー？もう。
会場：≪笑い≫　(④)

IKKOは共演者に冷たく反応されたり、からかわれたりしたことに対し、声色を変えて、具体的には鼻にかかった高い声で母音を延ばす話し方で反論する。その姿に笑いが起きる。また、同番組内で共演者の一人が「IKKOさんをなんとなくみんな邪見に扱う」と話しており、IKKOはテレビ上でよくからかわれたり、冷たくされたりしているということがわかる。邪見に扱われたIKKOが、それに対して特徴的な音声で反論するという展開は、

笑いが起きる展開としてテレビ上ではすでに定着しているようである。

IKKOと先に挙げたクリスはからかわれ、反論し、それが笑いになるという点で似ている。また、反論する発話において、クリスは常体から敬体へ、IKKOは敬体から常体へ、方向は逆ではあるが、スピーチレベルのシフトが見られるという点でも共通していた。

加えて、対象データ中では非言語的特徴として、はるなとクリスは話す際、手を大きくせわしなく動かすという共通点が観察された。これは3.1「毒舌・批判する」で扱った３名とは対照的である。手を大きくせわしなく動かしながら話す様子は、落ち着きなく、そして必死に映り、笑いを助長する。音声変化等の言語的特徴に加え、彼/彼女らのオーバーな手の動きもまた、テレビ上で笑いが生まれる文脈を作り出す１つの要素になっていると考えられる。

以上のように、笑いが生まれる文脈に違いはあるものの、はるな、クリス、IKKOの３名はテレビ番組において、いじられる存在であり、いじられた後の反応はそれぞれパターン化されていた。そして、その反応により笑いが生まれる展開がもはや定着しつつあることが観察された。また、いじられた後の対象者の発話にはいずれも、言語的特徴として音声変化、スピーチレベルやスタイルのシフトが確認された。さらに、非言語的特徴として、発話に付随する手の動きにも共通点が見られた。

４．まとめ

バラエティ番組をデータに分析を行った結果、「おネエタレント」の役割には大きく「毒舌・批判する」「教える」「いじられる」という３つが存在することがわかった。そして、その役割を担う人たちの言語行動を観察したところ、言語・非言語的特徴に共通点が浮かび上がった。河野（2015a，2015b）において多様であると結論づけられた「おネエタレント」の言語行動は、本稿分析によりその多様性の中にも共通した特徴が見られるということが明らかになった。結果を表２にまとめる。ここで挙げた３つの役割は、対象話者たちが持つ特性の一面を表しただけに過ぎないが、本稿分析を通してテレビ上で表現される役割・期待と言語・非言語的特徴の傾向的結びつきが証明された。また、言語行動に見られる特徴が役割・期待の演出に効果的に機能しているということが会話データを用いた具体的かつ実証的分析により明らかになった。

表２　対象「おネエタレント」の役割と言語・非言語的特徴

	該当者	特徴	
毒舌・批判する	マツコ ミッツ 美輪	言語	・ぞんざいな言葉の使用（※美輪は引用部のみ） ・疑問詞＋終助詞「のよ」（マツコ、ミッツ）
		非言語	・ジェスチャーが少ない。
教える	尾木 假屋崎 美輪	言語	・終助詞・間投助詞「ね」の多用 ・肯定的な発言。自身の主張を伝える際にも、相手をあからさまに批判、否定することを避ける。（尾木、假屋崎）
		非言語	・微笑みながら、優しい表情で話す。
		他	・専門分野のエキスパートである。
いじられる	はるな クリス IKKO	言語	・からかわれて、反論する際に、音声変化、スピーチレベルやスタイルのシフトが見られる。
		非言語	・ジェスチャーが多い。よく手を動かす。（はるな、クリス）

本稿で明らかになった共通点は、河野（2015a，2015b）で指摘したフィクション作品に登場する「おネエキャラ」たちの共通点とは性質が異なる。フィクション作品に登場する「おネエキャラ」たちは、個人差が少なく、形式面において共通した話し方をしていた[10]。一方、本稿で扱った「おネエタレント」たちには、フィクション作品のように全対象者に共通した言葉遣いは見られなかった。話者（出演者）が自分の意志を持ち、発話している以上、ステレオタイプ的な話し方に収斂されないのは当然である。「おネエタレント」たちの言語行動は、フィ

クション作品に比べ、自由度が高い。しかし、完全に自由というわけではない。テレビという媒体に出演し、活躍するには、番組制作者および視聴者から求められる役割を担い、期待を果たすことが歓迎される。そうした環境の下、「おネエタレント」たちは、求められる役割を演出できるよう、期待・イメージに沿った言語行動を選択していると考えられる。本稿ではその役割と言語行動の結びつき、およびその結びつきから生じる共通性を明らかにした。

【註】

1. 2006年10月７日から2009年３月10日まで日本テレビ系列で放送されたバラエティ番組。マリィ（2013）はこの番組を「メイクオーバー・メディア」であると述べ、「メイクオーバー・メディア」については、「対象者本人もしくは、その自宅などを変身・改造させるメディアのことである。」（p.17）と説明している。
2. 対象者を選ぶ上で、以下の２つのランキングを参考にした。
   ・「be ランキング　好感が持てるおネエキャラ芸能人」朝日新聞2013年５月18日
   ・「好きなおネエキャラタレントランキング」gooランキング 2013年７月４日
   http://ranking.goo.ne.jp/ranking/category/022id/video_TCJBBejKAVI1_all/　（アクセス日：2014年１月20日）
3. 表は年齢順である。
4. 以降、本稿ではそれぞれ「美輪」「尾木」「IKKO」「おぐねー」「ピカ子」「マツコ」「はるな」「ミッツ」「IVAN」「假屋崎」「クリス」「ナジャ」と呼ぶ。
5. 2013年１月～ 2014年５月に放送された番組をデータとしたため、ここでは2014年５月１日現在の年齢を記す。
6. 本稿では、『広辞苑　第六版』および田尻（1989）より、「毒舌」を「辛らつな皮肉のことばであり、そこには一種の批評性が含まれることがある」と定義する。
7. タレントの国分太一が進行役を務め、スピリチュアルカウンセラーの江原啓之がゲストの「オーラ」や「前世」、「守護霊」等を霊視し、美輪とともにアドバイスを行うというトーク番組である。豊田（2008）は、この時起きた美輪明宏のブームはそれまでに起きた「歌手や役者としての美輪を対象とした」ブームとは異なり、「美輪を神聖化して「美輪様」と崇拝し、テレビや本を通して人生の指針を乞うという熱狂的ファンが急増」（p.18）したと述べている。
8. 『現代用語の基礎知識』（2013）自由国民社　p.1145
9. 同性愛者から見た異性愛者のこと。（『デジタル大辞泉』）
10. 共通した話し方の大きな特徴として「女ことば」の積極的使用が挙げられる。本稿では紙面の都合上詳述しないが、フィクション作品上では、キャラクタたちの性的アイデンティティは様々であるにも関わらず、全てまとめて「男ではない男」とカテゴライズを行い、性を二項対立的に捉える規範的思考から「男ではない男＝女」であるとし、「女ことば」を使用させていることが伺えた。

【付記】文字化の記号

。１発話文の終わり　、①日本語表記の慣例に従い読点をつける②短い間（ま）があることを示す　h 呼気音
？ 疑問文で音調が上昇　《　》発話に関する注記　＿下線部の音が大きいことを示す　（↑）音調の上昇
≪笑い≫ 笑いが起きたことを示す　￥ ￥笑いながら発話　ー 直前の音の引き延ばし　［ 重複発話の開始位置
XXX 聞き取り不可能な発話　（　：　）短いあいづち等は“（話者：発話）”の形式で相手発話中に記入

【参考文献】

阿部ひで子ノーネス（2014）．ゲイ／オネェ／ニューハーフのことば―男性語と女性語のあいだ 日本語学，33(1)，44-59 明治書院.

伊豆原英子（1994）．感動詞・間投助詞・終助詞「ね・ねえ」のイントネーション―談話進行との関わりから 日本語教育，83，96-107 日本語教育学会.

大塚隆史（1996）．二丁目からウロコ 翔泳社.

河野礼実（2015a）．“おネエ”のキャラクタの言語行動―ジェンダーを演出する資源のクロスジェンダー的使用　社会言語科学会第36回大会発表論文集，30-33 社会言語科学会.

河野礼実（2015b）．「おネエキャラ」の言語表現について―バラエティ番組とフィクション作品を材料に 役割語・キャラクター言語研究国際ワークショップ2015報告論集，151-164.

クレア・マリィ（2013）．「おネエことば」論 青土社.

田尻英三（1989）．悪口・毒舌の変遷　国文学解釈と鑑賞，54(7)，105-110 至文堂.

豊田正義（2008）．オーラの素顔 美輪明宏のいきかた 講談社.
中村うさぎ（2014）．新宿二丁目の女王 キニナルブックス.
中村桃子（2010）．ことばで装うジェンダー（第 2 回講演）女性学連続講演会，14，17-47 大阪府立大学女性学研究センター.
藤井誠二、中村うさぎ、伏見憲明、アロム奈美江（2013）．第 1 章「オネェ」がメディアにモテる理由―オネェタレント、人気の秘密と素顔「オネェ」がメディアにモテる理由，3-54 春秋社.
メイナード・泉子・K（2005）．日本語教育の現場で使える談話表現ハンドブック，3-9 くろしお出版.
好井裕明、山田富秋、西阪仰編（1999）．会話分析への招待 世界思想社.